

模擬保育を通じた自己省察の試み

坂本 真由美

The Trial of Self-reflection on Teaching Practice in the Classroom

Mayumi Sakamoto

(2014年11月28日受理)

はじめに

教師及び保育者にとって省察（レフレクション）をやる力は専門的なスキルとして必要なものである。教職課程で必ずといっていいほど学ぶドナルド・ショーンの「行為の中の省察」は、多様な価値観で成り立つ現代社会の教育及び保育現場で教師に求められる新しい専門家像として定着している⁽¹⁾。しかしながら実際、教師及び保育者が自身の教育・保育実践について省察する力は、一時的に培われるものではなく、継続していきながら徐々に培われるものであり、時間と意志の強さが求められる。また、いつも同じ視点で省察するのではなく、毎回毎回の実践から多様な視点で省察することも試みていかねばならない。その視点を教師及び保育者はどのようにして気づいていくべきか。

教育研究の分野では、エスノメソドロジーという手法が使われることがある。それは、行為について解釈することが基本である。省察をする力は、行為を解釈する力と通じている。今回筆者は、「自身の行為を解釈する」という試みを、幼稚園教育実習指導の授業において学生が経験する機会として設けた。即ち、保育者養成においては実習準備の1つとして模擬保育を授業で学生に経験させることがあるが、自身の模擬保育を撮影させ、その動画を見ながら、学生が自身の行為を客観的に解釈するという試みを行ってみたのである。

本稿は、学生が、自身の模擬保育を解釈することによっていかなる省察の視点を発見したのかについて考察するものである。

1. 実習における設定保育の省察レポートから見られる傾向

まず、学生自身に授業で模擬保育を行わせるにあたっ

て、平成25年度の10日間の幼稚園教育実習（4年生の学外幼稚園教育実習）において、幼稚園現場で設定保育（部分保育、研究保育含む）がどのように行われたか、実習終了後のレポートから考察してみた。表1はその結果である。

表1から分析すると、指導計画案を書いて設定保育を行ったと述べた学生は40分以上の設定保育に多く、20分以下の設定保育では、朝の会、帰りの会の場面が多く含まれ、手遊び、読み聞かせに至っては指導計画案なしでほぼ毎日行っている状況である。また、給食指導で設定保育を行ってきた学生もおり、

「給食準備では当番や年少の子どもに目を配り、配慮が必要な子どもには1対1で声掛けをするなど援助が必要であることがわかった」

「毎日給食前にピアノを弾いた。練習の大切さを学んだ」
「当番の子が全体に声をかける前、始めの言葉が出にくいことがあるため、保育者が一緒に声を出すとういよかった」

「給食の時に話したことを次の日の設定保育につなげて活かすことができた」

「お弁当の時間から次の活動など、切り替えやメリハリの大切さを学んだ」

など、給食前後の流れや、子どもに責任を持たせた場合の援助と全体の援助の仕方など、多様な視点から気づきを見せている。

設定保育の活動内容については、部分保育としての活動内容として読み聞かせ（絵本、紙芝居、エプロンシアター、パネルシアターを含む）が194回と最も多いが、40分以上の設定保育では製作活動（お絵かき等の造形表現も含む）が最も数を占めている。

次に実習先での設定保育から学んだことについて、学生のレポートから表2にまとめた。

表2から読み取れるように、設定保育においては、保

表1 平成25年度幼稚園教育実習における設定保育の実際（実習生129名中）

設定時間	件数 (延)	内容（主活動、延べ数）								
		運動遊び	給食指導	手遊び	読み聞かせ	ピアノ	製作	ゲーム	表現	他
1日	19	13	2	1	0	2	13	1	0	0
半日	28	5	5	0	3	5	5	11	0	4
90分～150分	8	3	0	0	0	0	3	1	3	0
40分～70分	83	39	7	1	7	5	39	14	1	1
30分	50	7	0	3	5	9	7	16	4	9
15分～20分	69	1	2	10	31	18	1	4	2	17
10分以下	219	0	4	57	148	33	0	3	3	16
計	476	68	20	72	194	72	68	50	13	47

表2 平成25年度幼稚園教育実習における設定保育から学んだこと（実習生129人中）

内容	人数	内容	人数	内容	人数
臨機応変	31	展開力	7	約束事	2
計画・準備の重要性	26	ねらい	6	子どもの主体性	2
子ども理解	25	細かい配慮	6	姿勢	2
声掛け	18	メリハリ	6	自信をつける	2
全体を見る	16	導入	6	積極性	2
説明の仕方	16	環境設定	5	以下は各1名回答 クラス運営、助言・意見交換の重要性、園の方針の理解、自己理解、まとめの仕方、5領域の意義、効率性、専門性、前に立つ困難さ、日々の生活の理解	
自分が楽しむこと	13	教材研究	5		
子どもの行動の予測	10	子どもの関心	4		
シミュレーション	9	挑戦力	4		
途中の注意の引き方	7	自分が動く	4		

育における臨機応変さ、計画・準備、子ども全体を見ると同時に一人一人の子どもを見ることの大切さを含めた子ども理解、声のかけ方、といった重要性を改めて学生は認識しているようだ。

「設定保育を通し、まず自分が計画したことをやってみることで自分がどこに注目していなかったかがよくわかった」

「保育を設定する上で、子ども達にとって何が1番良いかを考えることで、援助が大きく変わることを実感した」

「指導案を考えて作っていても思っていた通りにならないこと、時間通りにならないことがあった。子どもの発達や力をしっかりと把握し一人一人のことを知って保育を計画し時間配分をすることが大切だとわかった…わかりやすい説明、子ども達が理解しやすいように準備したりすることも大切である。子どもの様子や生活の姿を見て計画をしっかりとし、子ども達に合わせた配慮ができるようになりたい」

といった学生の記述が多く見られた。

また、学んだことの第2位に挙がっている学生による設定保育の準備と計画性の重要性や指導案再認識も保育者養成側としても注視するべきものと考えられる。

学生の記述からは、

「事前に準備をしっかりし計画を立て、ねらいや目標を達成できるよう時間をかけたり、全体の保育との兼ね合いを考え、臨機応変に対応することが大切だとわかった」

「事前準備、シミュレーション、子どもの活動の予想が大切」

「もしもの場合を想定し、準備をしておくこと」

「集団遊びの時に集団に慣れていない子への対応を考えておくべきだった。今後は何度も指導案を見直す中で子どもたち一人一人を捉え主体性を育てたい」

といった内容が見受けられた。

このように学生の記述から照らし合わせてみても、表2の内容は、学生が実習先で気づいた学生自身による設

定保育の省察の視点であると捉えることができる。

では、実習先で学ぶ前に、授業における模擬保育でどれほどの保育の省察の視点を学生に育てさせることができるか。

2. 授業における模擬保育の試み

前掲した表1の幼稚園実習先での設定保育の実際及び表2の学生による設定保育からの学びの結果から、今年度の幼稚園教育実習指導の授業では、設定保育の準備として授業で模擬保育を行うだけでなく、その中で自己の設定保育の省察の視点をどこまで見つけることができるかを試みてみることにした。最初の授業で学生にこの試みについての意図を説明し、学生達はどのように思うか尋ねた。やってみたいという学生の挙手もあったが、多くの学生達はどのような結果になるのか予想がつかないこともあったであろうし、免許取得の授業だからであろうか、異論も出なかったため、結果、挑戦してみることにし、以下の13点を踏まえ、次年度の幼稚園教育実習指導の授業方法を以下のように計画することを学生と共通理解を図った。

- (1) 約120人の学生が2クラスに分かれ1クラス約60人になることから、15回の幼稚園教育実習指導Bの授業において、8コマを使って1回につき各クラス15分×4人のサイクルで学生が教室で模擬保育を行う。
- (2) 模擬保育では、発表学生は実際の実習の服装と態度で保育者になりきる。発表学生以外の学生は子どもになりきって活動をともにする。
- (3) ビデオ撮影班として各回3人が発表者の表情、姿、活動全体、子ども役の姿を含め撮影する。撮影を学生に任せたのは、多くの保護者をご自身の子ども達をビデオ撮影する気持ちの理解に近づいてほしいという意図と、実際の保育をビデオのレンズでいかに撮れば、子どもの活動全体が保護者等の第3者に伝わるのか経験をさせる意図を含んだ。
- (4) 自分が活動をともに行ってみたい子どもの年齢もしくはともに活動するのが不安な子どもの年齢を選び、なぜその年齢児を選んだのか理由を明確にする。この準備をする際に子どもの発達について研究することが求められる。
- (5) 発表学生が選択した年齢児に実施したい保育活動または実施に不安を感じる保育活動を選び、模擬保育の準備をする。なぜその活動を行うのか理由とねらいを明確にする。この準備をする際に、子どもの発達について研究することが求められる。
- (6) 指導計画案を作成する。実習先での設定保育を意識

し、事前に指導者である筆者に準備の相談やミーティングのアポイントをとりディスカッションすることで、園での指導者とのミーティングの練習を兼ねる。指導計画案の工夫を重ねていく。

- (7) 実際の園での設定保育時には園長を始め複数の保育者が観察に来ることから、発表当日は設定保育当日を意識し、事前に指導計画案を授業参加者全員に配布し、時間通りに開始できる余裕をもつ。
- (8) 発表時は保育者になりきって明るく元気に積極的に行う。
- (9) 子ども役の学生はできるだけ子どもとして発言・行動し、発表者の活動に参加する。
- (10) 発表者の発表が済んだら、子ども役の学生はコメントとして良かったところ、工夫するともっとよい点を書いて、発表者に渡す。
- (11) 撮影した動画は筆者がDVDに編集し、各発表者に渡す。映像には学生が映っていることから、個人情報管理については責任をもつことの同意をクラス全体で得た。
- (12) DVDにより、自身の模擬保育を観察する。
- (13) クラスメイトからのコメントと自身の動画分析をレポートにまとめる。それらを元に指導計画案を再工夫し、設定保育の準備とする。今後の改善作業を考慮し、できればパソコンで指導計画案を作成する力も試してもよい。

以上のような授業の約束事を学生と同意し、幼稚園教育実習指導の授業を進めてきた。

次の項では、その学生のレポートから、授業における模擬保育から学んだ自己の保育の省察の視点を考察する。

3. 授業における模擬保育の実際

まず、平成26年度の4年生がどのような模擬保育の準備をしたのか、彼らの指導案から考察する。表3は平成26年度の幼稚園教育実習指導で学生が行った模擬保育の活動内容である。学生の活動選択については、自分が苦手なもの、今までにしたことないもの、他の授業で作った教材の応用など、積極的に挑戦的に模擬保育の教材選択を行っていた。結果、製作を活動内容に選んだ学生が54人と最も多かった。読み聞かせの活動においては、パネルシアター、エプロンシアターなど絵本や紙芝居以外のものにチャレンジする学生もいた。

また、模擬保育における設定年齢は幼稚園教育実習の準備ということで年長児の5歳児を想定する学生が最も多かった。その他の学生は、既に縦割り保育のクラスに入る予定の学生や、年齢を設定するのにまだ理解が十分

表3 平成26年度幼稚園教育実習指導における模擬保育の活動内容 (127人中)

模擬保育内容	人数
製作	54
読み聞かせ	25
ゲーム	21
運動遊び	7
表現遊び	7
その他	13

でないという学生や、実習先で全ての年齢のクラスを回ることになっているのでどの年齢にも対応できるように取って年齢を設定しない学生もいた。

これらの結果から、学生は幼稚園教育実習の準備に関して、長時間の設定保育の可能性があることを意識し、自身の考えをもって教材や年齢設定を選択し準備に臨んだ姿が窺える。

実際の授業ではクラスメイトの前で緊張度も高かったであろうが、自宅から大荷物を抱えてまでも教材の準備に取り組む姿や、たとえクラスメイトが子ども役だとしても保育者らしく振舞おうとする発表者の姿が見られた。また、今回大変だったのは撮影班である。学生によればデジタルカメラやスマートフォンが主流の時代、ビデオカメラで撮影するという機会はあまりないらしい。幼児教育の現場では、保育者も行事を撮影することがあるし、園によっては保育者が撮影した園児の活動の姿を編集して誕生会や何かの行事で上映したりすることもある。その際、保育者に求められるのは園児の表情の豊かさを捉えることや、園での生活全体が見えるような園児の姿を撮影することであろう。そのような時代、撮影スキルや編集スキルも保育者に求められる専門性の1つにもなっている。編集は筆者が行ったが、実際に学生が一生懸命取り組んだ発表や活き活きしていた発表は、映像を通して後で見ても、その情熱や臨機応変に判断しようとする真摯さが伝わり、筆者自身も映像を通して伝わる保育の生々しさと素晴らしさと重要性を再認識した機会であった。

しかしながら、もっとも大切なのは、学生自身が自身の映像を見る勇気があるかどうかである。自己の姿を観察・分析するということは自己省察の専門性スキルの育成につながる。自己省察を行う際、重要なのは自分の姿に向き合うことである。まだ4年生の彼らにこのような作業を課すのはいかなるものと不安もあったが、早々とDVDを見て省察レポートを提出する学生もいれば、レポート締め切り間際で仕方なく見ざるを得なかった状況もうかがわれた。

表4 平成26年度幼稚園教育実習指導模擬保育の設定年齢 (127人中)

模擬保育設年齢	人数
3歳児製作	18
4歳児読み聞かせ	45
5歳児ゲーム	54
他	10

次は、学生による自己の動画分析のレポートから考察する。

4. 動画を通じた自己の模擬保育の観察

模擬保育終了後は、その場で子ども役の学生たちがA4半分の用紙に「良かった点」と「もっと工夫すると良い点」の2種類のコメントをしてもらい、その場で発表者に渡した。今回の模擬保育の試みで、最も学生が「自信がついた」とレポートで述べていた点は、クラスメイトからのコメントである。筆者が想像したとおり、恐らくDVDを見ていない学生は3分の1はいるようである。というのは、学生のレポートからDVDを見てからの省察の解釈が見当たらないからである。しかし、これは今回の筆者の想定範囲内である。なぜならば、自分の映像を見ることは大変恥ずかしく勇気のいることである。そのことから始めるのが自己省察、つまり自分と向き合うことの始まりではあるが、その勇気を持ち、自己省察の効果を感じるかどうかは現時点では学生自身に任せたからである。この授業の実験的な試みを続けていくことで、自己省察の是非を学生とともに話し合っ、どのような自己省察が彼らにとって最も効果があるのかを今後授業で見極めていく必要がある。

それでも、残り3分の2の学生がDVDを見て自己省察をしており、授業の課題として取り組んだ学生もいるかもしれないが、彼らのレポート内容から、本気で模擬保育に臨んだ姿も読み取れた。DVD以上に、学生のレポートから感じた彼らの喜びはクラスメイトからのコメントであり、ピアレビューとして同年代の学生から褒められることと、改善点を指摘されることを学生らが受け入れていたことは今後も指導上活かしていきたいと考える。

では、DVDを見た学生のレポートからは、いかなる自己省察の視点が見出されたか。表5は、模擬保育のDVDを見て学生が気づいた視点である。自己の模擬保育を動画から客観視して最も学生が驚いていたのが声掛

けの単調さや配慮のなさ、声の大きさやトーンの乏しさ、自身の表情の硬さや笑顔のなさ、目線を子どもに合わせていないこと、環境構成の配慮不足等、自分の保育の姿に対する発見である。

「自分では表情豊かに子どもと接していると思っていたが映像を見ると笑顔がなかった」、

「声掛けをたくさんしていると思っていたが、配慮の必要な場面で声掛けをしていなかった」

「保育者の立ち位置が大事だと思った。自分からは子ども達が見えていると思っている位置でも子ども達側からの画像では保育者が見えていないとわかった」

などの学生による記述があった。

更には、

「自信のなさがありありと伝わってくる、これでは子どもは楽しめない」

といったように、自分の姿を客観的に見ることで、自分の足りない面やどれほど自信をつけることが大切なのかというレポート考察が多かった。

ここで、表2の昨年度の学生が実際の実習先での設定保育から学んだ視点と、表5の今年度の学生が自分の映像から観察して学んだ視点を比較してみる。

現場での設定保育からは表2にあったように子どもの姿や子ども理解、子どもに合わせて臨機応変に対応することが学んだことの上位であった。一方で、授業での模擬保育の映像の自己分析から学んだ視点は、表2の4位から7位を占める視点と対応する。即ち、自己の模擬保育の映像の自己分析から学ぶ視点と実際の実習先での設定保育で学ぶ視点と一致しているものがあることがわかる。「声掛け」、「表情の乏しさ」、「子ども達への目線」、「環境構成」といったこれらの一致した自己省察の視点に、学生自身が実習に行く前に気づくだけでも、実習に対する不安感を少しでも自分で少なくすることに寄与できるのではないかと考える。例えば、実習中に自分は「声掛け」が足りないと言見すると、実習中にそのこと

にも集中して努力しなければならないが、実習前に「声掛け」が足りないことに気づいていれば、そのことを意識して実習に臨む分、「声掛け」をすることでどれだけ子どもが反応するのか余裕をもって冷静に観察することができると考えられる。また、自分が不得手であった「声掛け」を意識して実習に臨む分、「声掛け」以外の面での実習での学びに気づくことができ、実習での学びが広がるのではないかと考えるからである。

実際、学生からのレポートで大変印象に残っている考察は、自分の映像を見ることで自分の良さが再確認でき、自信がついたという考察をした学生が10人いたことである。クラスメイトに褒められた自信がついたというレポートはかなりたくさんあったのであるが、それに加え、自らが自らの実践を客観的に観察することでもっと自信がつく可能性があるのではないかと考える。しかし一方で、映像を見なかった学生についても分析しなければならない。彼らのレポートは、学生からのコメントで分析していた。つまり、自己省察をするにしても、まずは自分に合った自己省察の方法を開拓していかなければならないのかもしれない。それが更に自分に合った自信の付け方になるのかもしれないし、自己省察の色々な方法について学生と共に研究し合っていかなければならない。

更には、本論の自己省察の比較の分析は平成25年度と平成26年度の学生から行ったが、学生の特徴の傾向についても読み取らなければならないであろう。自己省察の視点が各年度の学生とも同じような結果が出るのか、次は同年度の学生の実習前、実習後の自己省察のプロセスを分析しなければならない。

まとめ

本稿は、幼稚園教育実習指導の授業における模擬保育の映像を通した自己省察から学生が発見する視点を明ら

表5 自分の模擬保育を映像から解釈した結果（平成26年度）（学生127人中）

今後工夫の必要な点	人数（延）	今後工夫の必要な点	人数（延）
声掛け	31	対話のなさ	6
表情の乏しさ	21	声のトーン	7
子ども達への目線	19	全体への配慮不足	7
環境構成	15	教材提示の方法	3
声の大きさ	13	時間配分	2
自信のなさ	8	練習不足	2
保育者の立ち位置	8	説明への配慮	2
自分の癖の理解	8		
自分の動きの不足	8		

かにするものであったが、最も効果があったのは、緊張せずに自信を持って設定保育をすることの大切さを学生が認識したこと、学生自身が自分の良さを再確認できたことではないかと考える。いくら設定保育の準備をし、指導計画案を作成して実習に臨んでも、実際の子も達を目の当たりにするとその準備や計画は、どんどん子ども達によって変化されていく。そのような中でも、実習生が臨機応変に判断対応し、実習生自身が楽しく設定保育ができた、子ども達と一緒に楽しめた、何よりも子ども達が楽しんでくれたという実感を知るきっかけにこの授業がなるために更に工夫を重ねていく必要がある。次なる課題は、学生が自己の姿を勇気を持って観察、解釈、省察できる力を引き出していくことにあると考える。

註

本授業では、助手の黒水るみこ先生の多大なるご協力を頂いた。この場を借りて先生に感謝の念を表したいと思う。

参考文献

- 岩城孝次、和田孝編著、『教職の研究－学び続ける教師をめざして－』、学校図書、2014年、63-65頁。
- 小林一穂、『行為と時代認識の社会学』、創風社、1995年
- 今津孝次郎、樋田大二郎編著、『教育説をどう読むか－教育を語ることばのしくみとはたらき－』新曜社、1996年
- バルド・ガーフィンケル他、山田富秋＋好井裕明＋山崎敬一編訳、『エスノメソドロジー－社会学的思考の解体－』、せりか書房、1993年
- 山田富秋・好井裕明編、『エスノメソドロジーの想像力』、せりか書房、1998年